



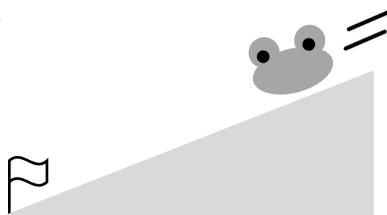
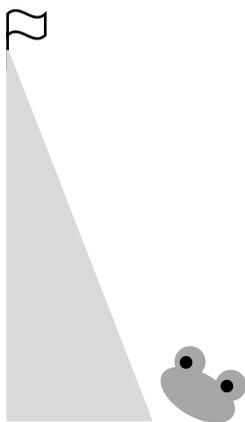
# 指導から支援へ



「子どものゴール」

ほんの少し変えてみる

を



## 実践ポイント

- まずはスタートの5分間が大切
- 全員が自我関与できる活動
- 教師の話す時間を減らし子どもの活動を増やす



## 実践事例 三

### ✓ まずはスタートの5分間が大切

小

「チャイムが鳴ったら終わるから、チャイムで始められるよう頑張ろう」  
 課題設定は語尾を「~しよう」から「? (疑問形)」へ。  
 映像を用意して視覚的に子どもを惹きつける。  
 指示は1回に一つ。



チャイムと号令の差が少しずつ縮まってきた。  
 「? (疑問形)」にすることで解決しようと考えを広げる  
 子どもが増えた。

電子黒板に指示を出しておき、短時間で活動できるように  
 したい。机の上の整理整頓や学習規律をしっかり整えること  
 も大事。



### ✓ 全員が自我関与できる活動

小

「せ~の」の合図で、全員がグー (賛成意見), チョキ (分からない), パー (反対意見) の意思表示。



発表する子どもが固定化していたが、なかなか発表しなかつた子どもが挙手するようになった。

みんなが生き生きするようになってうれしい。



**教師の話す時間を減らし子どもの活動を増やす**

小 中

ストップウォッチを持って教師がしゃべっていた時間を計測。

目標時間を設定し、しゃべる時間を意識して減らす。

ペア活動を取り入れ、子どもが活動する時間を増やす。



ペアでの学習に積極的に参加するようになった。  
活気にあふれてきた。

手や体全体を動かして活動しながら学びを得ることができ  
るような授業をしたい。

**Good Point!****セルフモニタリングできる教師は成長できる**

教師の話している時間を計測することで、自分の話している時間を客観的事実として把握し、自らの指導のあり方をセルフモニタリングしているところがすごいなと思いました。

指示の出し方を変える、教師の話す時間を減らす、全員が意思表示できる場面を取り入れるなど、様々な工夫をすることで子どもの姿が変わってきている様子がよく分かります。

学級経営や授業がうまくいかない場合に、うまくいかないことを子どものせいにするのではなく、自分自身の指導行動を変えることのできる教師は、「できる教師」「成長する教師」になるはずですよ！





## 実践ポイント

- 先生との秘密の合図
- 視覚支援を効果的に
- 指示はシンプルかつ短く
- 音と動作の合わせ技



## 実践事例 三



## 先生との秘密の合図

小

「先生との秘密の合図を決めよう」と話し、その子どもの好きなピースサインに決める。教師がその合図をしたときには話を聞くことを約束する。



ピースサインを意識して話を聞くようになった。

「秘密」という言葉は特別感があり、どの子どもにも響くのではないと思う。



## 視覚支援を効果的に

小

中

指で数字を出して、その数を子どもに言わせる。

指示は黙って黒板に書く。

黒板の今やっている個所に磁石を貼り現在地を示す。

ジェスチャーやイラストを使って指示を出す。



教師の示す指の数を言って集中することで、静かに活動できることが増えてきた。

周りが静かになり集中し始めることで、騒いでいた子どもが雰囲気の変化を感じ前を見るようになった。

できている子どもを褒めることで他の子どももできるようになった。

友達に尋ねることが苦手な子どももいるので、黒板に書くことは効果的。

注意したり叱ったりして学級の空気が悪くなっていたが、ゲーム感覚で指示が聞けるようになった。



**指示はシンプルかつ短く**

小 中

指示は肯定的で端的に。  
箇条書きのようなシンプルな指示。  
指示を出す前に「はい」の一言で注目。



次に何をすればよいのかを聞く子どもが少なくなった。

端的に伝える習慣が身に付き、指示が通りやすくなった。

**音と動作の合わせ技**

小

手拍子しながら、教師が「みーなーさん」子どもは「はあい」  
教師「かっこいい姿勢！3・2・1！」子ども「ピタッ！（よい姿勢になる）」



合言葉化することで子どもが意識して動けるようになった。ピタッ！と揃うことが気持ちがよいみたいで、喜んで姿勢をつくるようになった。

低学年は言葉遊びや手遊びが大好きなので、幼児期の体験を生かした合図を用いると効果的だと感じた。

**Good Point!****自ら気付ける合図で信頼関係づくりもできて一石〇鳥の技**

共通の合図を作ったり、子どもと二人だけの秘密の合図を考えたりすることで、自ら気づき指示が聞けると同時に担任の教師との信頼関係も深まり、「この学級、楽しいな」と思える子どもが増える、まさに一石〇鳥にもなる取組だと思えます。

また、体を動かすことで、耳からの情報だけではなく、身体感覚として自然に指示を聞く態度が身に付き、更に「全員がそろう」ことは「気持ちがよいこと」と感じる子どもたちに育っているところが素晴らしいですね。



## 実践ポイント

- 強化と弱化・認める指導の合わせ技
- 時間を意識「おしゃべりタイムは1分間」
- ミニテストは静かな教室づくりの効果大



## 実践事例 三



## 強化と弱化・認める指導の合わせ技

小 中

授業の中でできている子どもには「いいね」という認める言葉がけ。  
私語をしている子どもに対しては毎回注意するのではなく、適宜スルー。  
2分間でも集中できている時間があつたら「さすがだね。かっこいい」



認める指導を行ったタイミングで、それまでできていなかった子どもは、「あ！今これをする時間か」と気付いて取り組み始めた。すでに取り組んでいた生徒たちも集中力が高まり、私語が減った。

注意したり叱ったりする回数が減った。しかし弱化だけでは不十分な部分があるので、できている子どもや望ましい行動をしている子どもを意図的に取り上げ、認める声が行った。強化と弱化を組み合わせ、認めるだけでこんなに変わるのだと驚いた。



## 時間を意識「おしゃべりタイムは1分間」

小 中

「おしゃべりタイムをとります！1分間とるので好きなことをたくさん話していいよ」と電子黒板にタイマーを表示。



おしゃべりタイムの間にたくさん話すことができた子どもは、タイマーが鳴ると自然に静かになることができた。何回かおしゃべりタイムを取り入れていると、だんだんとおしゃべりタイムがなくても授業が始まると切り替えができるようになった。

注意をしなくても自然に静かになることができて、教師のストレスもなくなった。おしゃべりタイムをとるときにはタイマーなどを用いて時間を明確にすることが大切だと感じた。時間を区切ることで子どもも話す時間と話を聞く時間のメリハリを意識して活動できた。



## ✓ ミニテストは静かな教室づくりの効果大

小

算数の時間の始めは計算50問。一発で100点だったらシール。終わったら紙の裏にお絵かき。

授業の最初の5分間でミニテストや漢字ワーク。



静かに集中して取り組む姿が見られ、落ち着いて授業に参加できる子どもが増えた。

私語をせずに過ごす時間ができて、話合いの時間と話を聞く時間のメリハリがつくようになった。

子どもによって課題を工夫する必要があると思う。教師の「静かな教室が好きだな」の一言も大切。活動する時間の見直し、発問や子ども同士をつなぎ方なども意識していきたい。



## 👁️ 時間の管理を怠ると…

小 中

おしゃべりタイムを取り入れる。



おしゃべりが好きな子どもはずっと話し続けてしまっ  
…。

時間の設定を明確にしなかったために、ダラダラと話し続ける子どもがいた。時間の設定を明確にして、タイマーなどで子どもが時間を意識するように取り組むことが大切だと思った。



Good  
Point!



## 静かな時間（例外）を広げる

いつまでもおしゃべりの止まらない学級に必要なことは、きっとメリハリをつけることを学ぶことなのでしょう。1分間のおしゃべりタイムをとることで時間を意識するようになり、もの見事におしゃべりタイムをとる必要がなくなったというのは、まさにその成果です！

静かに過ごせることができたなら、次はその例外を増やすこと。どうしてできたかの成功の責任追及も大切です。



## 実践ポイント

- 聞いている子どもにハンドサイン
- 聞き方名人になるには、まずは聞く練習から
- 数字を使った指示は簡潔かつ具体的に



## 実践事例 三



## 聞いている子どもにハンドサイン

小

話が聞いている子どもにはOKサインやグッジョブサイン。  
子どもと一緒にハンドサイン（手をグーにしたら静かに前を見る）を考える。  
教室の仲間「うさこちゃん」人形で注目を集める。  
まねっこ手遊び。時には難しくしたり早くしたりする。



意識して前を見る子どもが増えた。静かにして欲しいときに子どもがグーをするようになった。何度も指示をしないできなかった子どもたちが、集中して聞こうとしてくれるようになった。メリハリをつけることで能力が高い子どもも飽きずまねっこ手遊びをして、楽しみながら話を聞く姿勢をつくることができた。

リズムを変えたり、かけ声を変えたりすると高学年でもできたことがよかった。



## 聞き方名人になるには、まずは聞く練習から

小 中

話をしている人の方に身体を向けて聞くと、向けなくて聞くとではどちらが気持ちよく発表できるのかをロールプレイ（役割演技）で体験する。

「聞き方名人」のプリント（『学級経営ハンドブック』掲載）を教室に掲示。  
五つの大切なことを1日に一つずつ確かめて意識させながら聞く練習を行う。  
聞く姿勢の練習（手はひざ、足ペタ、背筋ピン）をする。



促さなくても身体の向きを意識して聞こうとする子どもが増えた。うなずいて話を聞く子どもや教師の方を向いて話を聞く子どもが増えた。

学習規律の確認の大切さを感じた。スモールステップで聞き方を身に付けさせることができたのがよかった。話をする前に注目させることは効果的だった。楽しみながら話を聞く練習をし、ルールをしっかり確認したい。



**数字を使った指示は簡潔かつ具体的に**

小 中

「今から1分間話します」「今から三つ説明します」など数字で具体的に示す。

黒板やホワイトボードに伝達事項を書き、視覚支援も併せて行う。

「大事なことから1回しか言わないよ」と念を押す。



最初に注意喚起することで、話し手に集中することができ、前を向いて話を聞ける子どもが増えた。

活動と聞く時間のメリハリが付き、子どもの反応やうなずき、返事が増えた。

「聞ける」状態ができるまでの時間が非常に短縮された。

話を聞かなければいけないという雰囲気づくりができた。  
もう少し短く明確な指示ができるよう、指示の出し方を工夫していきたい。

できたことに対するボイスシャワーや成功の責任追及をしていきたい。

同じ話を繰り返してしまうことを無くし、簡潔に話すようにしていきたい。

「尋ねればいつでも教えてくれる」から「聞いていなければ自分が損をする」に。

**Good Point!****「楽しみながらやる」ことで続けられる**

どの実践も「これなら私もできる!」とすぐにやってみたくなるものばかりです。「聞きなさい」「静かにしなさい」を繰り返すのではなく、ハンドサインをしたり、指人形を使ったり、ほんの少しの工夫で教室の中に「友だちの話を聞こう」という空気が醸し出されている様子が手に取るように分かりました。

また「聞き方名人」になるための練習という発想もすごいと思います。指示や禁止ではなく「楽しみながらやる」という「ほんの少し変えるだけでうまくいく」のコンセプトが感じられます。



## 実践ポイント

- 反対意見の伝え方を教える
- ポジティブメッセージ・共感的なメッセージ
- 子どもの言い分を聞き、Iメッセージで受け止める



15



## 実践事例 三



## 反対意見の伝え方を教える

小 中

「反対意見を言えることはいいことだよ。でも反対意見を言うときには言い方があるんだ」

「まずどうして反対なのかを言う。そしてどうしたいかまで言うんだよ」



反対意見の伝え方が分かるとマイナスの発言は減り、学級会を盛り上げるきっかけになった。

子どもの言動には必ず何か意図がある。ただ単に否定するだけではなく、どうしてこのような言動をとっているのか聞いてみる必要があると感じた。



## ポジティブメッセージ・共感的なメッセージ

小 中

「〇〇さんがこうしてくれたら先生うれしいな」

「これできたらかっよかった？」「先生も最初はできんと思っちゃったけど、できるようになったよ」

「気持ちは分かるけどその言葉はふさわしくないよね」と感情は否定せずに言葉に注目して改善させるようにする。



「先生がうれしいならそうする」と叱ったときは全く違う素直な反応が返ってきた。

「もしかしたら、できるかもしれん」と自信はなさそうだが、少しやる気が出てきて「私できるで」と友達に言う子どももいた。

初めてのことに對しては「できん」や「分からん」などのネガティブになるのは当たり前だと思って、まずはその気持ちに寄り添い、やる気になるような声かけを心がけた。子どもがやる気をもって活動すると、教師も「どんな考えが聞けるんだろう」とワクワクした。




**子どもの言い分を聞き、Iメッセージで受け止める**



「私は〇〇して欲しいんだけど、できるかな？」

「さっきの言葉。私は悲しい気持ちになったな。どうして分かる？」と問いかけ、考えさせ、最後に「だから〇〇してほしかった」と伝える。



渋々ではあるものの、教師の話に聞こうとした。

まわりの子もたちから「確かにそうかも…」 「マイナスの発言は人を傷つけるよね」との声が聞かれ、納得する空気が感じられた。

マイナス発言を受け止めるには教師の心に余裕がいる。マイナスの気持ちも（教師は）受け止めてくれるんだと子どもが気付けたことはとてもよかったと思う。

教師が「〇〇して欲しい」「〇〇のような行動がとれるようになって欲しい」と伝えることはとても有効だと思った。


**Good Point!**

**マイナス発言は未学習か誤学習**

子どもの発言を否定するのではなく、まずは受け止めて、それからIメッセージで「先生は〇〇してほしい」ということを伝える。これは教育相談の基本中の基本ですが、実践はなかなか難しいのが実情です。それを忠実に実行できていることが素晴らしい！

マイナス発言をしている子どもは、反対意見の正しい言い方をまだ学習していないか、間違った学習の仕方をしているかです。禁止や注意だけでなく、感情は否定せず行動に注目し、「どうすればよいのか」を一緒に学ぶ場を設け、ポジティブな声がけが心がけるなどは、ベテラン教師でも簡単にできることではありません。



## 実践ポイント

- モデルを示し頑張りカードやシールで自己肯定感アップ
- スモールステップのゴール設定
- 見方を変えて感謝の言葉を伝える
- 我慢している子どもへの声がけを忘れずに



## 実践事例 三

モデルを示し頑張りカードやシールで自己肯定感アップ 小 中

できている子どもを褒めて「がんばりカード」を用意してシールを渡すようにした。

できている子どもの名前を次々に言って頑張り伝える。

教師が「これくらいの声の大ききさで言うよ」「こんな風にするよ」とモデルを示す。



シールをもらえて喜ぶ姿が増え、マイナス行動が多かった子どもはプラスの行動が増えた。

「自分もやろう」と行動を変化させる子どもが増えた。

子ども同士でよいところ見付けの活動につなげたい。

名前を呼んでいる間にも行動を変化させる子どもが何人もいて、名前を呼ぶのが追い付かないという嬉しい事態になった。

教師がモデルになり、立ち居振る舞いを丁寧にすることが大切。その逆の影響の大きさも感じた。

スモールステップのゴール設定 小

少し頑張れば達成できるゴールを設定。花まる三つでシールがもらえる。



「どうせ自分は…」と言っていた子どもが花まるをもらって、好ましい行動が増えた。

行動の振り返りをするを受け入れずに拗ねることが多かったが、スモールステップのゴールを設定することで頑張る姿が見えた。



## ✓ 見方を変えて感謝の言葉を伝える

小 中

一人一人の頑張りやよい行動に対して「ありがとう」「うれしい」などの感謝の気持ちを丁寧に伝える。

我慢している子ども（できている子ども）を褒める。「〇〇しよう」という肯定的な言葉がけを行う。



よい行動が増え、学級の雰囲気が明るくなった。  
落ち着いて学習に取り組むことができるようになってきた。

気になる子どもを注意するのではなく、よい子どもを褒める意識は大切だと感じた。

一人一人に目を向けて細やかな手立てを講じていく。



## ✓ 我慢している子どもへの声がけを忘れずに

小 中

「分かる?」「困ってない?」「頑張っているね」などの声がけで、授業に取り組む姿勢を評価していることが伝わるように意識する。



黙々と課題に取り組む子どもが増えてきた。落ち着いて学習に取り組むことができるようになってきたが、まだ気分次第では否定的な発言や行動をしてしまう子どもがいる。

今後も頑張っている子どもの姿を見逃さず評価していきたい。



Good Point!



モデルを示して、あるべき姿を伝えることで学級全体の成長が期待できる

温かい雰囲気をつくる秘策の「モデルを示す」「認める指導を意識する」「ほんの少し頑張ればできるゴールを設定」の三つを、理論を踏まえて丁寧に実践されていることが伝わります。きっと「ほんの少し変えたこと」がいつの間にか「当たり前」になっていることでしょう。



## 実践ポイント

- そもそも、なぜ学習規律が必要？
- モデルとなる行動を具体的に褒め、広げる
- つまらないと私語や手遊びをしたくなる



## 実践事例 三



### そもそも、なぜ学習規律が必要？

小 中

学習規律がなぜ必要なのか、そしてどうしたら守ることができるのかを子どもと一緒に考える。

決めたことが、すぐできるようになるのは難しいので、認めたり、「少しずつ頑張ろうね!」「応援しているよ!」と励ましたりする。



自分事と捉え、納得したことは守ろうとする姿勢が芽生え、子ども同士で声をかけ合う姿も見られるようになった。

1学期の始めに、学級の意識をいかに高めるかが肝心。言われたからするのではなく、なぜそうする必要があるのかを考えることが大事なんだな。教師が主語の「授業をしやすい学習規律」から、子どもが主語の「子どもが決めた学習規律」に!



### モデルとなる行動を具体的に褒め、広げる

小 中

モデルとなる子どもを具体的に褒め、真似した子どもも褒めていくことで教室全体に広める。



褒められることはどの子どもも嬉しいようで、自分も頑張ろうと、望ましい行動の真似をする子どもが増えた。

Iメッセージの褒め方が効果的。次は「いいねカード」なども取り入れてみようかな。



## ✔ つまらないと私語や手遊びをしたくなる

小 中

教師が一方的にしゃべる授業ではなく、友だちの意見を聞き合うことで学びが深まる授業づくりを意識したり、同じレベルの問題の繰り返しでつまらないと感じさせないように、チャレンジ問題を用意したりするなど、授業に変化をもたせる。



授業に対して目的意識や次のステップへの意欲が見られる場面が増えた。

子どもたちが意見を聴き合える授業、意欲的に学べる授業をつくるのが大事な。



## 👁️ 繰り返しの声かけが大事

小 中

チャイム着席や授業中の席立ちが減るように、今やるべきことや次にすることを明確にする。



まだまだ定着はしていない。

継続しつつ、声かけや効果的な指示について、もう少し探っていきたい。



Good Point!



### 自分たちで決めたことは頑張れる！

子どもたちが学習規律を自分事として考えられるように支援していることが素敵ですね。自分たちで考えたことは納得して、守ろうとするでしょう。モデルとなる子どもを褒めて学級全体に広げていくことも、自然によい学習環境をつくることにつながりますね。一般的に、低学年は、めいいっぱい褒め、年齢が上がれば、認める声かけにシフトしていくとよいといわれています。そして、上手くいかないことを子どものせいにせず、子どもに話を聞いて自分の授業を振り返ることができる教師は、魅力的な教師ですね。「今何をするか明確にする」ということは、一つの手立てとして有効だと思います。手立ては一つだけではなく、前述の支援や指導と合わせて行くと、効果が高まるでしょう。



## 実践ポイント

- 動きを取り入れる
- 発表のバリエーションを増やす
- 暇な時間をつくらないようにする



## 実践事例 三



### 動きを取り入れる

小 中

授業前のストレッチ、立って音読、ペア・グループ活動、立ったり座ったりする、前に出てくる等の活動を適宜取り入れる。



ボーっとしている子どもが減り、頑張って授業に取り組む子どもが増えた。

動きを取り入れることで、活動にメリハリがついて、子どもも楽しそう。少しの工夫で授業の雰囲気が変わるんだな。



### 発表のバリエーションを増やす

小 中

音読や発表の際に、意図的指名や列指名、意図的な挙手指名からの相互指名など、『ほんの少し変えるだけでうまくいく～学校あるあるヒント集～』のp.27を参考に行う。



発表スタイルのバリエーションが多くなることで、子どもは飽きずに緊張感をもつことができた。また、普段自分から発表しない子どもも発表できるようになった。

もっと色々な発表のバリエーションを増やして、状況に応じて使い分けられるようにしたいな。



## ✓ 暇な時間をつくらないようにする

小

課題が早く終わって飽きてしまうと他の子どもにちょっかいをかけたリ床に座り込んだりするるので、課題が早く終わった後の行動を示す（別の課題をする、終わったら困っている友達にヒントを出す、黒板に書きに来る等）。



マイナスの行動が減ってきた。

もっと難しい課題を準備するなど、他にも色々な方法を試したい。



## 👁️ 授業に動きを取り入れたが…

小

中

様々な動きを授業に取り入れたリ、自由交流を行ったりする。



少しは集中できているが、さほどの変化は見られない。

取り入れる動きや交流が、遊びになってしまうと意味がない。意図や教師の声がけを吟味する必要があるな。集中する授業ができたときに寝る方が効果的かもしれない。



Good Point!



## 集中するためのルーティーンをつくる

子どもを1時間の授業でずっと座ったままにさせるのではなく、授業の中で効果的な動きを取り入れたリ、発表のバリエーションを増やしたりして、飽きさせないように工夫していることが素晴らしいですね。そして、同じように「動きを取り入れる」ことを行っても、上手くいく場合とそうでない場合があるのは、子どもの状況とのマッチングや教師のアプローチの違いに理由がありそうです。

今回は上手くいかなかった場合もありましたが、何のためにこの動きを取り入れるのかという意図や、教師の声がけの重要性に気付かれていることは、きっと、次へのステップにつながるとと思います。



## 実践ポイント

- 積極的に赤ペンで花まるをつけ、肯定的な声かけをする
- 達成感を味わえる活動を取り入れる
- よい変化を見付けて褒める
- 学び合いのお助けマン登場



## 実践事例 三



積極的に赤ペンで花まるをつけ、肯定的な声かけをする 小 中

1時間の授業の中でこまめに机間指導を行い、まる付けをしたり、よい意見の所に線を引いてあげる等、積極的に赤ペンを入れ、肯定的な声かけをする。

書いている文章を少し紹介し、どうしても思い付かない子どものヒントにもなるようにする。



「書けたね」「こんなことにも気付いたがや！」と認め励ますことで、子どもの意欲が上がった。また、よい意見に波線を引くと、自信がない子どもも前向きに発表することができた。

些細なことだけれど、やってよかったな。色々な方法で子どもとの関わりを増やしていくことが大事だな。



達成感を味わえる活動を取り入れる 中

無気力の原因の一つに、学習が苦手ということが考えられるので、学習が苦手な子どもでも達成感を味わえるようなエンカウンターや、謎解きのような活動を取り入れる。



進んで活動に取り組む子どもが多かった。褒められたときは嬉しそうにしている。

褒めたり認めたりするポイントを教師がどんどん見付けていきたい。



## ✓ よい変化を見付けて褒める

小 中

提出物が出せない子どもが提出できたら、提出できたことを褒める。



継続はできていないが、提出できる頻度が上がった。

「できた」の基準が子どもによって異なるが、新たな成功を見付け、認めることがどの子どもにも必要だな。



## ✓ 学び合いのお助けマン登場

小

テストや課題の直しをする際に、「お助けマン」を呼ぶ。課題が100点になった子どもから、他の子どもを助けに行く「お助けマン」になれる。ただし、誰の所にも行ってよいのではなく、必要があって「お助けマン、来てー」と拳手した子どもの所に行く。



子ども同士で助け合って解決し、説明がより上手になる子どももできた。

答えを直接言わないということを徹底するのが大事。教え方が上手な子どもの姿を紹介して全体で認めていきたい。



Good Point!



## 小さな成功・変化を見付けて価値付ける

「意欲が低い・無気力」という状態から、「できた・やってみたい」という気持ちを生み出すために、きっかけになりそうな活動を取り入れたり、子どもをよく見て小さなことでも成長を伝えたりするなど、寄り添う姿が素敵ですね。目の前の子どもがもっとよくなるために何ができるだろうと考え、それが頑張りや成長につながる喜びを感じられることは、教師冥利に尽きますね。



## 実践ポイント

- つまづきを知る
- 注意や指導を個別対応にする
- よいことで注目を浴びれば頑張れる



## 実践事例 三



### つまづきを知る

小 中

いきなり注意するのではなく「何か質問ある?」「何か困っていることはある?」と聞く。



今までは反抗してくることが多かったが、このように聞くことで、分からなくて困っているのかそうでないのかが分かるし、こちらから寄り添うことで、その後注意しても素直に聞くことが多くなった。

注意や叱責をするにしても、頭ごなしに怒るのではなくて一度子どもに寄り添うことが大事だと気付いた。また、その後の関係が悪くならないよう、子どもが注意を受け入れられるように対応することも重要だと思った。



### 注意や指導を個別対応にする

小

全体の場で一方的に注意することをやめて、困っていることや反抗的な態度、問題行動の原因について個別対応で子どもと一緒に考える。



個別で話をするすることで、教室よりも素直に話を聞くことができていた。解決策を考え、反省するきっかけになった。

個別でゆっくり話すことはとても大切!




**よいことで注目を浴びれば頑張れる**



授業妨害をする子どもが活躍し、よい注目を浴びることができるような場面をつくる。



学級みんなに承認されることで問題行動の頻度が減っていった。たまに行動に出してしまったも、担任の言葉で落ち着くことができています。

授業妨害をする子どもと同じテンションでヒートアップしていたときは、お互いにとって苦しい時間だった…それでも根気強く付き合い、よい方向に変化してくれたことが何より嬉しい！


**Good Point!**

**困った子は、困っている子**

授業妨害をする子どもを「困っていることがあるから授業を妨害し、注意を引こうとしている」という視点でよく見て、その子どもの困り感を知り、寄り添うことから次の手を考え、子どもが前向きになれるように支援していることが素敵ですね。個別対応で寄り添いながらも、指導すべきことはきっちりと指導し、今後の解決策を子どもと一緒に考えることができれば、問題行動はよりよい行動に変わっていくことでしょう。





## 実践ポイント

- 一旦気持ちを受け止める，場所を変えて落ち着かせる
- 学級のみんで解決策を考える
- 事実確認と解決の基礎パターンで解決の道筋をもたせる



## 実践事例 三



一旦気持ちを受け止める，場所を変えて落ち着かせる

小

状況によって、「嫌だったんだね，後で聞くからね」と一旦気持ちを受けとめて授業を進めたり、「少し落ち着いてくる？」と声をかけて空き教室に連れて行ったりする。休み時間になったら必ず目を合わせて話を聞く。



落ち着いて授業を受けられるようにはなったが，ケンカ自体はあまり減っていない。

気持ちを落ち着かせる対応の他にも，ケンカの原因自体への対応も合わせて考えなければいけない。



学級のみんで解決策を考える

小

当事者が落ち着いて話ができる状態であれば，ケンカの内容を学級で共有し「みんなならこんなときどうする？」と問いかけ，全員で解決策を考える。



自分たちで考えた解決策は，互いに守ろうとするようになった。友達に注意をする際の声かけも優しくなった。

互いを思いやるような声かけが増え，よい雰囲気が増えて嬉しい！



## ✔ 事実確認と解決の基礎パターンで解決の道筋をもたせる 小

小学校の中学年は、発達段階としてもケンカは日常茶飯事。解決に向けた道筋として、①事実確認→②聞き取りの段階で「自分がしてしまったことでよくなったことはある？」と問う→③すぐに言えたら「よく言ってくれたね、辛かったね。ありがとう、どうする？」と共感しながら褒め、当事者に選択を委ねる(④謝る)という道筋を基本のサイクルとして一緒に考える。



子どもと一緒に解決を考え、解決のサイクルが子どもに定着すると、大抵の子どもは互いに謝罪して解決できるようになった。ある程度の事例はスムーズに解決できるようになったが、子どもによっては繰り返したり、後で新たな事実が発覚したりすることもあった。

発達段階や子どもの特性によってケンカの対応は千差万別なので、その時その時で変える必要はあるが、一定の「パターン」があることは、子どもに安心感を生むと思う。聞き取り段階の「事実確認」では、後で新たな問題が出てこないように、「これで全部？」と聞いて確認することが大事だと思った。



Good Point!



### 感情を受け止め、行動は変えさせる

ケンカをした子どもの気持ちを受け止めたり、場合によっては落ち着くために時間や場所を構えたりしつつ解決策を探る手立てが工夫されていますね。「ケンカの対応は状況によって千差万別」というのは、まさにその通りだと思います。安易にその場しのぎの対応で終わらせるのではなく、子どもの気持ちを受け止めながら学級でもアプローチを続け、短期的、長期的両面での支援を積み重ねていくことが肝要ですね！



## 実践ポイント

- 小さなことから褒め、Iメッセージで気持ちを伝える
- よさを認めながら粘り強く関わる



## 実践事例 三



小さなことから褒め、Iメッセージで気持ちを伝える

小

小さなことでも褒める。ランドセルを片付けることができたときも褒めるなどする。そして、教師がその子どもにどうしてほしいのかIメッセージで伝える。



頑張って活動に取り組むことができた。

小さなことでも褒め、Iメッセージで伝えることを続けていきたい。



よさを認めながら粘り強く関わる

小

中

叱るだけでなく、子どもの様子をよく見て、できていることや人のために行動できていることなどを褒める。



得意分野で発表したり、自分が正解した問題を友達に教えたりするなど、学級の中で活躍する場面が出てきた。

最初は反抗する態度に心が折れそうだったけれど、根気強く関わると、次第に困っていることを相談してくるなどの関係を築けるようになってきた。今後も子どものよさを生かしてよい場面を取り上げられるように関わっていきたい。



## Iメッセージで気持ちを伝えたが…

小

Iメッセージで伝えた。



「知らんし」と言われてしまった。

そもそも人間関係が築けていないとIメッセージも響かないことが分かった。まずは、子どもを肯定的に認めることが大切だな。

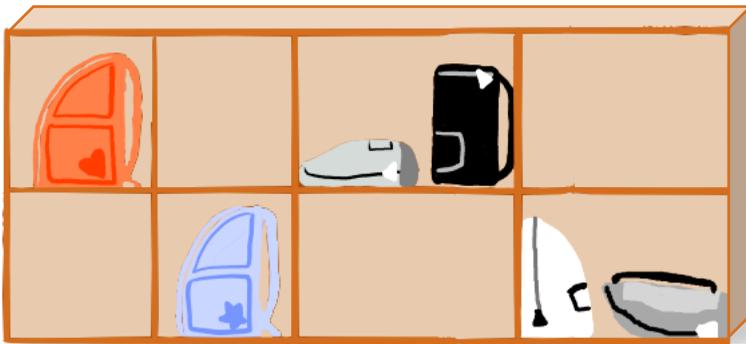


Good Point!



## 対決のIメッセージ

子どもに反抗的な態度を続けられると、マイナスな気持ちになることだと思います。心が折れそうになるのも当然でしょう。それでも、子どもを見捨てず、よい所を見付けて関わり続けることは、大きく誇れる教師力ですね。素敵です。子どもは口では色々言いながらも、自分のことを大事に思ってくれているかどうかは感じていることもあるでしょう。周りの教師と連携しながら、粘り強く関わるとよいですね。





## 実践ポイント

- 屁理屈も、まずは一旦聞く
- 指導は子どもの気持ちが落ち着いてから
- 頑張っている場面で褒め、成功体験を積ませる



## 実践事例 三



## 屁理屈も、まずは一旦聞く

小 中

注意に対して屁理屈を言うばかりで会話にならなかったため、屁理屈に対して叱るのではなく、まずは言い分を最後まで聞くことにする。その際、否定的な声かけはせず、子どもの気持ちを認めるようにする。



屁理屈はまだ言っているが、自分の気持ちを発言することが増え、粘り強く取り組む姿が見られるようになった。

はじめは会話にならず頭を抱えたけれど、子どもが変わっていく様子を見ると、とても嬉しかった。そして、一生懸命頑張ったことを素直に自分で表現できるようになったことが一番嬉しかった。



## 指導は子どもの気持ちが落ち着いてから

小

授業時間外に、ゆっくり時間をとって気持ちを聞き、本人の気持ちが落ち着いてから指導をする。



逆切れすることは0にはならないが、だんだんと不平や不満を言うことが少なくなり、自分が気に入らなくても全体のことを考えて我慢することができるようになってきた。

子どもをただ叱るのではなく、気持ちを聞いて、落ち着いて話をするのは大事だし、信頼関係も築くことができるんだな。



**頑張っている場面で褒め、成功体験を積ませる**

小

頑張っている場面を見つけてとことん褒め、まずは気の合う仲間と活動する中で成功体験を積ませるようにする。



苦手なことも友達にアイデアをもらって取り組み、そのことを子ども自身でも1学期で一番頑張ったこととして挙げていた。

これからも成功体験を増やしていきたいな。

**Good Point!****直そうとするな、分かろうとせよ!**

屁理屈であっても、子どもと向き合う時間をつくって話を聞き、子どもの心が落ち着いた状態になるのを待って指導していることがポイントですね。子どもの心が教師の話を受け入れられる状態になっていなければ、どんな話をしても伝わらないことがほとんどではないでしょうか。成功体験を増やして自信につなげることも、子どもの心が卑屈にならず、話を聞けることにつながっていくでしょう。





## 実践ポイント

- ほったらかしにせず必ず声をかける
- 友達と協力しながら問題解決をする場を増やす
- ゆっくり話を聞く
- 保護者と連携する



## 実践事例 三



## ほったらかしにせず必ず声をかける

小

「どうしたの?」「体調悪い?」など声をかけてから、今、何をするのかを手短かに伝え、取り組めたときには「頑張ったね」とプラスの声がけをする。



最初のうちは指示したことが終わったらまた寝てしまうこともあったが、少しずつ、班のメンバーに聞いてできるようになってきた。

寝ている子どもには声をかけ続けることを長期的に取り組みながら、他の子どもとも協力しつつできることを増やしていきたい。



## 友達と協力しながら問題解決をする場を増やす

小

中

ペア対話や班活動など、友達と協力しながら問題解決をする場を増やす。



問題が分からないときには、寝たり、話を聞かなかったりすることがあったが、友だちと活動することで勉強が楽しいと思うようになった様子が見られた。

今後、班長の役目を任せて、班のみんなを引っ張っていけるようにもしたい。





## ゆっくり話を聞く




しんどいことはないか、今の心の状態はどうかなど、ゆっくり話を聴く。



自分のことを聞いてもらえて嬉しい様子だった。

一人一人、ゆっくり話を聴くことが大事だと分かった。




## 保護者と連携する




小学校1年生は5時間授業を受けることだけでも体力が必要なので、寝ている子どもについては保護者に生活の様子を聞くなどして連携を図る。



子どもの様子を見て保護者に連絡したところ、生活リズムが不規則であることが分かった。本人も「授業は真面目に受けたい」と言っている旨を伝えて、早く寝る声かけをお願いした。すると、授業で頑張る姿がよく見られるようになった。

本人の頑張りを認めながら、これからも声をかけたい。



**Good Point!**



**顔を上げた時がチャンス!**

寝ている子どもをほったらかしにせず、声をかけたり、話を聞いたりするなど気にかける姿勢が大事ですね! 保護者とつながりをもって共に支援することも効果倍増です。保護者に協力を仰ぐ際、本人の気持ちを伝えることも保護者が前向きに協力してくれることにつながりそうですね。どの子どもも見捨てないという教師の姿勢は、寝ている子どものみならず、教師の姿を見ている周りの子どもたちにも伝わり、信頼関係を築くことにもつながることでしょう。



## 実践ポイント

- 一指示一行動
- できていることに目を向ける
- 近くで早めの声がけを



37



## 実践事例 三



### 一指示一行動

小 中

一つの行動に対して、一つの指示を出すように意識する。更に、することを板書で視覚化し、ペアでできているかどうかを確認させる。



みんなと同じペースで取りかかれるようになり、自分から行動できるようになった。全体的にも取りかかりが早くなり、何をすればよいのかが明確になったことで、授業中に別のことをすることが減った。

全員の活動が揃うことで、状況を把握できるようになった。日によっても、子どもの状態が違うので、そのときにあった声がけや支援を行いたい。




### できていることに目を向ける

小 中

できていないことについて指摘するのではなく、「もう書くことができたんだね」と、できていることにすぐに反応する。または、周りのできている子どもを褒める。



自分で取りかかろうとすることが増え、「今日はもうこんなことができたよ」と報告してくれるようになった。遅れていても、褒められると嬉しそうに次の課題に取り組むことができた。

困っていることがないか聞くことで、その子どものつまずきに気付くことができた。褒められている子どもを見て周りの子どもも頑張ろうとする姿勢が見られた。



## ✓ 近くで早めの声かけを

小 中

周りの子どもからも目立つことなく伝えてあげることができるので、前の方の席にしたり、机間指導をしたりして、子どもの近くで早めに指示を出す。



することが分からなくても筆箱やノートを用意したり、声かけて書き始めたり、全体としても教師と同じスピードで進めている子どもが増えた。

指差して知らせたり、声かけをしたりするだけでも違うということが分かった。全体をぼんやり見るのではなく、もっと机間指導を積極的にして、できている子どもの即時評価を心がけていきたい。



## 🐼 全体を待たせることにも…

小 中

一指示一行動の徹底。「鉛筆を持つ」「ノートを開ける」といったことまで細かく指示を出す。



ほとんどの子どもは一緒に取りかかり、そろえることができたが、取りかかりが遅い子どもは、それでも遅かった。そのため、全体を待たせる結果となった。

全体も個人も大切だが、個人的には「遅れている人も気にかけていることを示しつつ、全体を進める」ことが大切ではないかと考えた。



Good Point!



### すべきことを明確にして、子どもの成長に目を向ける

何をするべきかが明瞭だと、子どもたちはすぐに行動に移すことができますね。一つの行動に対して一つの指示だと、より分かりやすく、学習のスタートや一人一人のペースもそろいます。つついできていないことに気が取られてしまいがちですが、できていないことについて指摘するのではなく、机間指導でさりげなくできるようなるための手立てを打っていることが素晴らしいです。更に、できていることはすぐに褒めたり、OKサインを送ったりすることでやる気が持続しますね。



## 実践ポイント

- 書き方のルールを確認
- 書くことの精選
- GIGAタブレットの活用



## 実践事例 三



## 書き方のルールを確認

小

「一マス空ける」「一行空ける」などのルールを全体で確認し、分かりやすいように、画用紙で黒板に示す。また、板書とノートの文字数を一致させて、どこを書いているのかが分かるようにする。



ノートのどの場所に、何を書くのかが明確になり、子どもたち同士でもノートの確認ができるようになった。書き方をそろえることで、遅れていた子どもも少しずつ書くことができるようになってきた。

口頭で指示を出さなくても、黒板を見てノートに丁寧に書くことができるようになった。また、「一行空ける?」「どこに書くの?」という声も少なくなり、授業に集中して取り組むことができるようになった。



## 書くことの精選

小

板書を色分けして、必ず書くところ、書いた方がよいところ、書かなくてもよいところを分ける。



自分で考えて必要なところまで書いたり、少しずつ書くスピードが速くなったりすることで、書くことに対して抵抗がなくなってきたと感じている。

みんなと必ず一緒に歩幅を合わせて進まなければならないと思うと、子どもも教師もしんどく感じてしまう。勉強が苦痛だと感じないようにするためにも、個々に合わせた配慮が必要だと改めて感じた。書くことは大切だが、全てを書くということにこだわり過ぎず、目的を意識するようにしていきたい。



## ✓ GIGA タブレットの活用

中

板書を模したワークシートを配付したり，教師の板書計画をタブレットで写真にとってロイロノートで配付したりする。



「早く書かなきゃ」という焦りが減り，授業中の教師の言葉に耳を傾ける余裕が生まれた。

これまでは，書くことだけに必死になりすぎて表情が硬かったが，今では，余裕が生まれてにこやかな表情になった。個別支援が必要な子どもについても，自分でできるようになる手立てを考えることが大切だと感じた。

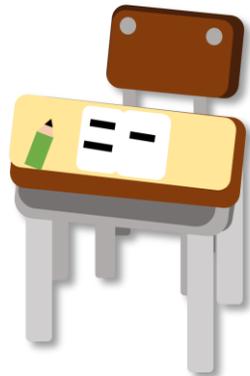


### Good Point!



### 「書くこと」の何に困っているのかに気付き，支援方法を工夫する

書けるようになるための手立てがたくさんある実践でした。「一マス（一行）空けます」等，細かく指示を出しながら板書していくことで，子どもたちには，ルールとして書き方が定着しますね。更に，板書とノートが同じになるように書き方をそろえると，書き抜かりに自分で気付くことができるかもしれません。短期記憶が苦手，字を書くこと自体が苦手等，書くことに困り感が強い子どもには，タブレットで板書を撮影して記録したり，板書計画のコピーを渡したりすることも有効な手立てとなると思います。





## 実践ポイント

- やってみたいくなる仕かけづくり
- できることを一緒に考える
- できることからスモールステップで



## 実践事例 三



## やってみたいくなる仕かけづくり

小 中

興味のあることと関連付けたり、活動の手順を短く区切ったりしてやる気をもたせる。例えば、国語の授業の最初には電子黒板を使って漢字クイズを行い、それをルーティーン化する。



授業の始めに楽しい活動があることで、学習のスイッチも入りやすくなった。活動をルーティーン化することで、見通しをもって活動に取り組むことができるようになった。

少しでも学習に取り組もうとしている姿を見ると嬉しくなる。また、該当する子どもだけでなく、学級全体により学習の雰囲気ができただけでなく、今後なるべく安心して子どもたちが活動できるように工夫していきたい。



## できることを一緒に考える

小 中

「やればできる」ではなく、何ならできかを一緒に考える。



はじめは何もやらなかった子どもが、自分のできることを探して行動するようになった。周りの子どもたちも「すごい!」「頑張れ!」などの温かい声かけをする場面が見られた。

子どもたちは、やりたくないわけではなく、どうしてよいか分からず困っているということに気付いた。これからも、何ができるかな?と一緒に考え解決し、いずれは、自分でできることを考えて行動できるようにすることを大切にしていきたい。




**できることからスモールステップで**



「できん、やりたくない」という子どもに対して、具体的なゴールを示す。例えば、リコーダーなら、「四小節のみ、難しければ、のばす音だけ吹いてみよう」といったようにスモールステップで示す。そして、できたことをすかさず褒める。



やってみる前は、「どうせできない」とつぶやいていたが、チャレンジしてみると意外にもできて喜んでた。少しずつ、自分から取り組む姿が見られた。褒められると「次は？」と自ら進めるようになった。

子どもの中に達成感や満足感をもつことができたなら、それがやる気につながる。得意なことや苦手なことがあるので、「苦手」が「嫌い」にならないようにすることは大事だと思った。


**Good Point!**

**困り感に寄り添い、やってみたくなるような仕かけを作る**

子どもたちにとって「やりたくない」ことを、「やってみようかな」「これならできかな」と思わせる仕かけが必要ですね。その子どもの困り感に気付き、優しく、根気強く寄り添っている様子が思い浮かびます。教師がスモールステップで、一つのことができたらすかさず褒めること、結果ではなく過程を評価することで、達成感や満足感をもつことができ、更に次のステップへのやる気につながると思います。





## 実践ポイント

- 机には必要な物だけを置くことを徹底
- 遊びが始まるパターンをつかむ



## 実践事例 三



机には必要な物だけを置くことを徹底

小 中

机の上には、必要な物だけを置くということに、全員で取り組ませる。



触りたくなる物を置かないということを徹底すると、手足をバタバタさせることはあったが、手遊びは減った。

『あるあるヒント集』の四つのタイプを、目の前の子どもの実態に合わせてセレクトし、指導していきたいと思った。



遊びが始まるパターンをつかむ

小

子どもの手遊びが始まるパターンをつかむ。手遊びが始まってしまうであろうタイミングで意図的に指名し、授業の方へ意識を向かわせる。



周囲の子どもの様子を見て、「今、何をしているのか」を確認する様子が見られるようになった。

手遊びが始まってしまう、シンプルな理由「授業がつまらないから」に対しては授業改善が必要で、根気強く取り組む必要があると感じている。




**持続が難しい…**

小

今やるべきことを指示するようになり、お手本となる子どもを積極的に褒めたりしているが…。



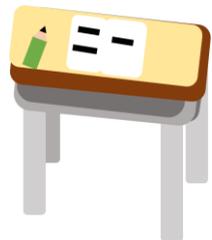
一時的に手遊びをしなくなるが、持続しない。

手遊びをしないような事前の声かけや、よい状態が長く続くよう工夫していきたい。


**Good Point!**

**手遊びのタイプを見極め、その子どもに合った対応を**

授業に意識を向けさせることで、手遊びをすることを未然に防いでいくということですね。手遊びを注意するよりも、授業を改善していこうとする前向きな姿勢が素晴らしいです。ただ、手遊びをすることで、集中できるタイプの子もいます。一時的には手遊びをしなくなっても、持続しないのはそのせいかもしれません。子どもの様子を見極め、他の友達に迷惑をかけていない程度ならば、“受け流す”ことも指導の選択肢の一つです。





## 実践ポイント

- 注意の仕方を工夫する



## 実践事例 三



## 注意の仕方を工夫する

小 中

「～しません」ではなく、「～しよう」「～できるといいな」という言い方で注意する。

個別指導は、指導したい子どもの傍らに行き、静かに注意する（全体の前で、大声で注意しないようにする）。



この方法にしてから素直に聞けることが多い。

教室に注意の音が響かないのは、周りの子どもにとっても落ち着くことができると感じた。



## プラスの声かけを試みたが…

小

プラスの声かけにする。



その言葉がけも真似をする。

効果が薄い。



## Good Point!



## 注意の仕方を変えて、周りの子どもへの刺激を減らす

同じ注意を伝えるにしても、言い方一つで印象が違いますね。大声で怒鳴る指導を続けると、注意したい子どもには届かないどころか、繊細な子どもがおびえてしまい安心して教室にいらなくなる可能性もあります。上手くいく教師はおそらく、子どもの様子をよく観察して、言葉がけや声色、関わりをその子どもに合わせて工夫したのでしょう！

その他、ふざけて注意を真似している場合には、シナリオを作ってロールプレイを体験させる方法もあります。教師の注意を真似することで、注意をされた人にどのような気持ちを与えてしまうかをみんなで話し合うこともよいかもしれません。